



2007.4.20



マーク制作: 関知磨子(秋津コミュニティ: 蚊帳の海一座)

(融合研のホームページ) <http://www.yu-go.info/>
(事務局) 〒273-0122 千葉県佐倉市中志津7-17-4 (TEL & FAX) 043-463-1929

本号の内容

巻頭言: 学校と地域の融合教育研究会相談役・地域子ども教室運営協議会長 庄子平弥
「やっぱり“夢”への“挑戦”は必要だ！」

- 1 「融合子ども教室」の総括会議から
- 2 10周年記念事業から
静岡県芝川町オペレッタ「かぐや姫」の概要
神奈川支部「厚木フォーラム」の概要
- 3 島根県情報
「第4回綺羅星7フォーラム」の概要
「第11回融合フォーラム in 島根」の進捗状況

巻頭言

やっぱり “夢” への “挑戦” は必要だ！

融合研相談役・地域子ども教室運営協議会長 庄子 平弥

平成17年度からお引き受けした「地域子ども教室融合研運営協議会」の協議会長という大仕事を終え、2年間の融合研としての地域子ども教室の活動を省みて感じたことは、国の宝、地域の宝である多くの子ども達の安全・安心、そして幸せを守るには、地域の全ての人々が子ども達に肌で接し、地域の子も達が地域の大人のそのぬくもりを受け止めることの重要性を実証した。

即ち、子ども達の教育は、学校と家庭だけでは成り立たない。学校と地域が融合し、渾然一体となって守り育てる具体的な行動性の伴った活動を展開する必然性を行動で示すことが出来たのでは無かるうかと考えている。

平成16年秋、文部科学省の呼びかけに応じ、融合研としてこの委託業務を引き受けるべきか否かを論じ合った時、日頃の私の持論“夢”への“挑戦”無くして前進なし、やってみようの一言で始まったこの事業を今静かに終えて、ホッと肩の荷を降ろした感じがしないでもない。

平成18年度融合研地域子ども教室は、全国で35教室実施されたが、登録児童数3,350名、参加延べ人数58,168名に達した。指導者登録人員932名、出勤延べ人数19,260名であったが、これだけ多くの子ども達が、全く事故もなく地域の大人の慈愛に満ちたまなざしに見守られ、放課後或いは土曜・日曜・夏休み期間などに楽しく過ごした思い出が、生涯子ども達の大きな宝ものとなり、いつの日かこの子どもが大人になったとき、きっとその思い出を地域の子も達への愛情として戻ってくることだろうと思う。

平成18年度子ども教室に指導者として参画した延べ2万名に近い皆様には、心からご苦労様でしたと申し上げます。如何ですか、心の底から心地良い疲れをお感じになっていることでしょうか。

融合研の日常の活動分野も組織結成以来10年余を迎え、多方面の活動が行なわれていますが、私は今回の地域子ども教室の活動を体験し、敢えて次の提唱を行ないたいと思います。

融合研に“子ども教室部会”を設けませんか。

これからも全国各地で、「放課後子どもプラン」による「放課後子ども教室事業」が推進されることでしょうし、行政とは関わりなく自立下これらの活動が各地で展開されることでしょう。これに伴って多くの融合研に関わる皆様がこの事業に直接手を出されることでしょうかから、「子ども教室」或いは「コミュニティスクール」等名称はともあれ、それら体験活動等を融合研として研究活動の一環とし、そのための部会を設置することを提言させていただきます。

1 「融合子ども教室」の総括会議から

平成17年度から、文部科学省よりの委託を受けて開始された融合研の「地域子ども教室（ゆうごう子ども教室）」が、終了しました。その総括的な会議を、平成19年3月10日に、事務局のあった仙台市で行いました。19年度以降の国の方針が変更になったこともあり、活発な議論が展開されました。できるだけ詳細に報告します。

1 開会

2 協議

(1) 融合研運営協議会の2年間の活動概要報告

(2) 総括会議準備資料の報告から見てきた各子ども教室意見概要報告

- ・ 延べ児童数 60000人
- ・ 延べ指導者 3000人
- ・ 予算がなくなっても継続して実施する工夫

(3) 意見交換（会長判断で、実名で掲載します）

教室を実施して見えてきた問題点、課題

藤尾 市教委サイド、融合研サイドあり。指導者同士のつながりが難しくなっている。

子どもたちは土曜日には学校が開いているという定着あり。

庄子 子ども教室で勉強を教えてほしいとの要望、抽選に外れたことへのクレームでの苦労したことがある。

三嶋 スタッフの数を増やすことができず、負担感が大きくなった。たまの手伝いはOKでも、常時活動は難しい。自発性にもとづいて居場所をつくのが大事と考えている。

佐竹 算数嫌いの子どもを救いたい(低学年)と前から思っていた活動。手芸はクラブ活動としての広がりの中で手伝った。学校は何もしなかったから。

宮崎 「宿題教室」に対する教員の声。教師の指導力不足を地域の住民に頼るとするのは抵抗がある。それはなかったか。

岸 地域のおばさんが塾をしている。それを救いたいという人がいる。校長に事前に話をしておいた。やがて中学生も加わってくる。

宮崎 子ども教室で遊びは受け入れられる。学校の現状は、休み時間を減らし放課後残して勉強してやる時間を確保するという考えが出てきている。

- 庄子 2007年問題の中で高齢者の社会参加の努力が大事な時期と考える。子どもを世話する気持ちを持たせる段階に来ている。
- 渡邊 大学生が企画運営する教室。学生が学びなおすという姿勢。チャレンジスクール。お年寄りを学校に入れることで元気になり、友達を呼んできてくれる、習ったことを教えてくれる、子どもたちを関わることを楽しみにしている人が多い。
今市大石小学校。安全管理に借り出されることが多いので疲れている。
- 庄子 時間つぶしで受講する連中がいると話をしたくない。市民センターが人を集めることでいいのか。参加が趣味。話を聞いたら行動に起こすことが必要。積極的に続けることが大事。
- 森本 あたごっこは地元の地域づくりと融合の考えを広げる目的があった。今年は仲間が増えて、メンバーの家で活動することになっている。おちっこでは、元地域教育指導主事が(西森さん：養護学校教頭)動いてくれる。高齢者の方をつないで活動を続けている。二つの教室で交流ができるように考えたい。越知っ子の高齢者のすごさ 団塊の人々が帰ってきたときに元気がないと嫌だから、元気のある街にしておきたいから頑張っている。高齢者を招いて行った。
- 渡部 ふらたまをやったとき、子どもたちがたくさん来ると何だ何だということから始まり、高齢者と子どもたちとのふれあいを広げたい。勉強は、宿題教室をやってみたが、良かった。終わった子は、自分のドリルを持ってきてやっていた。
- 庄子 受講者の中学生が、いつの間にか指導者になっていたという事例があった。
- 渡邊 地域子ども教室をきっかけに、10以上の団体が集まった。融合子ども教室はどうしてこんなに人が集まるの(社会教育関係者の感想)。水曜日の午後は部活もなし。歌の好きな学校、オペラを中心にして、中学校でとりくみたいと思うことをやった。教師に学社融合でできることを考えていきたい。学区を離れて子が通ってくる例もあった。「拡大」をキーワードにして取り組んだ。「参画」も。子どもたちが意見をいう、地域の人たちがやりたい活動を言う、職員会議で取り入れる。ふじっこ広場 受益者負担でいこう。(城)。
- 城 親たちがやりたいという声が多い。アンケートの結果は、やりたいという声。できることときにはやるというのが現状。人を育てるのが課題。
- 針生 地域リーダーをどう育成するかがテーマ。子どもと関わるのは良い、言われたことはやるという大人は多い。運営に関わるのは大変だから嫌。子どもたちの姿にもそれが反映している。ビジョンをもち、プロデュースできる人材をどう育てるかが課題。地域の学校、市民センター、教育を媒体として子どもを育てる、市民の意識をそこに集約することを考えている。リーダー育成が重要。
- 雅子 中志津。やりたい大人はたくさんいるが、それぞれが活動していることが多い。地域リーダーが大人の学校、地域の学校。大人も楽しいことをしよう。スタッフの仲間だけでなく仲間を連れてくる、増やしている。大人が自分たちで楽しむことで子どもとのかかわりが楽しくなる。
手芸、折り紙での箱づくり、カードケース作り。流れでお昼を食べながら、午後の活動にそのまま参加する事例も効果がある。
- 崎 仙台市実行委員会では、16教室全教室が継続を表明。うまくいっているところは、やはりリーダーがいた。行政への要望は、予算がなくても関わっていただけることが大事だという声があった。
- 庄子 予算が無くても、声をかけてくれれば、動きたくなる。助けてくれと言われればそうしたくなる。
- 渡部 行政マンの立場。文科省はかなり変わった。どこの市町村でやっているかの情報まで届いていなかった。行政の職員は、自分の町でやっているかどうか知らなかったところがあった。民間団体は願いがある、それに近づけようとする、そのミッションに近づけることができない。学

校になってプラス、地域にとってプラスになったか、そういう評価から考えると、まだまだできなかった。終わって成果は見たが、最初から意図できたかという、できなかった。文科省の補助、3年でというのは、財務省からの指示。

かゆいところに手が届く。お金があるから一緒にどうと学校に。融合研で買ったものとして使いませんかという誘いをした。プログラムはすべて忍路小学校の教頭がやった。既存のスポ少年、英語教室をそのまま生かした。学ぶことをステップに次につないだことが良かったのでは。今年は貸しを作った年。来年度、備品費をつけることができる。必要なものを探して、70名の半分は児童養護施設。学園の先生も加えたい。児童養護施設を地域に開くことで補助金がつく。

庄子 行政の立場は、あまねく公平に・・が金科玉条。市民の立場からは、やれることからやレということで進めたい。

【休憩】

子ども教室の活動が、学社融合の活動にどうつながったか

常田 さ文科省は市川を真似しているという意識。コミュニティクラブを続ける。10年の歴史。予算は減るが続ける。各中学校区ごとに60万の予算で活動。鹿沼のオペレッタ、芝川町のオペレッタ、四街道のまじゅりんこを訪問。休みに行き場所の無い子どもたちを受け入れている。「やるのはいいが、誰がやるのか。」2年間を見て、やはりやって良かったと思っている。学社融合は確実に広がったと実感している。

庄子 まじゅりんこは四街道市が活動を認め、予算を組んで継続することになった。場所代がまかなえる。全市を対象として実施。小・中学校で、居場所が得られない子どもたちを受け入れている。

渡邊 学社融合ってこういうことだったんだね。予算はつけられないけど、施設はフルに使えるようにします。来年やると言ってくれるなら予算をつけますよ。行政からの声かけ。

研修として学ぶことと実践を通して。投げかけだけしてやるのは私たち。

庄子 高知県と高地市の温度差を感じるがどう？

森本 2年前の高地フォーラム。18年度土佐の教育改革の趣旨の中で、学社融合の理念を入れた。芽生えが生まれている。県教育委員会が支援してくれた。高地市は動かない。不登校問題が命題で学社融合でアプローチするとこまで意識が高まらない。横山課長(県)の意識があった。

庄子 各教育委員会と仲良くしていくこと、各地でフォーラムを開催することで、地元根ざさせる効果がある。

城 行政に食い込み、理解を深める努力をする。協力者の発掘が大事。「ぼくは待ってた」という反応があった。うるさくとも、しぶとく続けることが大事。まっている人がいると認識して頑張りたいたい。

佐竹 サークルに投げた形。子どもたちに参加してもらおうスタンスで行ってきた。コーディネート等には苦労はしなかった。大人だけで固まらず子どもが入ったら面白いという形で進めてきた。本当の意味で居場所のない子どもたちを受け入れる為には、間口を広げる工夫も必要。

宮崎 28の教室が継続を表明。それがうれしい。行政と教室との関係を対立関係ではなく、協力関係を築くことが工夫。できる人が、できるときに、できるだけ理念が広がるのが大事。学校現場にも。

鈴木 学校内の余裕スクールに声かけをして子ども教室を開いた。18年度には融合研の活動が評価されてきたことを感じる。子どもの成長を感じられることがうれしい、それを築く大人もうれ

しい。学校との関係をうまくつけれないできたことが残念。学校からのアプローチ、ご苦労様の一言が欲しかった。管理職が子どもの活動に目を向けていくことが大事。

野澤桂子 新しい町にできた学校。昔は街道があった。総合的な学習で地域を学んでいた。お願いばかりしていた。弟子入り体験として33件のお店、事業所に年3回、子どもを派遣。

学校の様子が見えてきた。学芸会を見に来てくれて感動した。市民センターとのつながりもあった。ゆっくりだけどじわっと進んできた。地域の叔父さんたちとのつながりができた。地域から続けて欲しいという声もあがった。危険のとき駆け込んだのも、弟子入りした店だった。

庄子 能動的に動けば、地域も開かれるということがいえる。

小山 地域の人たちは、積極的に思う人は忙しくできないけど、声をかけてくれという。餅つきなどはたくさん集まる。自分の条件とマッチすれば助けてくれる参加してくれる。行政への食い込み、売り込みはどうすれば。どこかで壁をつくってしまう。嫌な思いをしたか、うぬぼれているのか。組織がセクト意識が強い。互いの連携がない。地域への理解は広がっている。10年の中で。子どもは安心して行かせられる。先生方には浸透してきている。行政の意識をどう変えるか。先生方の行動にはなっていない。

渡辺 23課、113の事業。青少年にかかる事業をそれぞれでやっている。整理しなくてはならない。

庄子 協働支援という立場からどう？

藤尾 行政マンでないと思われている。市民が融合という話をする中で、学校は使えないという行政が入る。市民が思っていること、行政が思っていること、差がある、違いがある。行事の重複、限られた人だけに依存している。行政の限界を市民・住民が乗り越える。市民・住民がものを言える立場にしていきたい。役場の中に敵が一杯いるのかな。

庄子 図書費として国から与えられる予算を、大人が食っている。大きな借金を子どもたちに残していこうとしている。学校に声をかけ、行政にものを言っていく。それをどう考えていけばよいか。図書費の全国状況。格差が大きい。子どもの図書離れを言う資格なし。学社融合を市民に、行政に、理解を深める活動をすすめることが大切だと考える。

渡部 130億×5年間。図書支援。民間団体からの願い。企画公募型で予算を与える方向に動いている。企画書をつくるモデルを提案してほしい。針生さんをお願い。予算書をつけて企画書をつけて、行政に要求する。2次募集であがってくる。

庄子 学校を中核として……の。全国で20ヶ所。1000万ほどの予算。積極的に呼びかけていく努力が必要。

この事業を通じて見えてきた課題について

庄子 本部事務局も大変だった。各教室も大変だった。価値観の共有、行政と連携するコツ。好きでやっているという感覚の行政もあった。行政はあてにしないという教室もあった。

渡邊 放課後子どもプランを推進する栃木県だが、鹿沼市では来年度は1つ(今年は5つ)だけ補助する。市教委の意識は、遅れている。大学生が企画運営している。宇都宮市の清原第1小学校。子ども自体の動きが全く違う。大人への言葉づかいや大人への接し方が全く違う。来年度、継続して実施していく。

三嶋 前原市の議員になった。中に入ったら見えてくるものもある。学社融合、最終的には街づくり。今は人に頼っている状況。学校も行政もまちづくりを悩んでいる、一担当者だけではできない、市長がどう考えるかにかかってくる。マニフェストとして学社融合をやらして成功体験を重ねて全国に発信することでクリアするしかないかなと思う。

- 宮崎 市民憲章などで町をどう向けていくかを考えていくことが必要。まちづくりという言葉はあるが、どんな子どもに、どんな大人にしていこうかということで、学社融合は上手に使っていいのではないかと考えている。
- 庄子 モデルケースを作って欲しい。
- 森本 あたごっこは民間だけでやっている。校長には文科省委託と書いて欲しい。チラシをつくるときに欲しい。
- 車 習志野市のトップは理解したくない。秋津小学校がコミュニティスクールとして指定された。地域学校協議会をパートナー会議に変えていく。融合教育は学校がうたっていること。そこを生かすことでもっと進んでいこう。ただし、コミュニティスクールは学校に都合の良い人しか集まってこない、だから破綻するだろう。秋津は、スクールコミュニティでやっつけよう。365日の開放を考えていこう。一般教職員の理解を得られるまで開放していこうと考えている。
- 種田 地域子ども教室の2年間。良い助走期間だったと思う。これから成果が出て、これから充実するとき。自立してできる時期になっている。28地区で継続。成果。融合ということば、こども教室の開講のなかで、どのあたりで出てきているのかが気になる。最初から融合と言っているのか、活動が進んでから言っているのか、そのあたりをどのあたりでやっているのか。また、融合をどんなイメージで一般の方々が受け止めているのかが知りたい。理念は書きにくい、実践は書きやすい。子ども教室はわかるけれど、融合という言葉はいつかどう理解されているか。企業の顧客満足度というとき、中間管理職はどう理解し、どう説明しているか。どこでも同じではなく、差別化が図られてはじめて見えてくる。融合研活動とはこういうもの、最終目的はまちづくり、そのステップとして子ども育て、そのときに融合とは必要なんだよという柱があってもいいのではないかと考えている。安全マニュアルをつくって、一度も連絡がなかったことは幸せだと思っている。
- 庄子 地方の教育再生を考えている。こういうチャンスの中で学社融合を認識させる。ひとつひとつの実践を通して進めていくことが必要である。

新年度の子ども教室の動きについて

- 庄子 矢吹資料(放課後子どもプラン・実施意向調査結果によって、傾向が見えた。放課後子ども教室は8318実施が6119へ、放課後児童クラブは15857実施が16831へと結果が見えた。皆さんの地域での準備等からどう考えてるか。
- 渡部 学童も困っている。250日の実施は、3年後難しい。240日は可能だが10足りない。それを補足するのは放課後こども教室と抱き合わせる必要がある。児童クラブ開設していても補助金をもらっていないところがある。
- 矢吹 学童やっていないところで、これを上手く使うといいという姿勢。教育委員会では新しい事業という捉え。交付税処置をしているので後でフォローをしてくれる。自治体は予算がつかないという理由でやらないところが多い。
- 渡部 やってしまっているのか。補正処置が必要。
- 宮崎 学童保育は10歳未満が対象。求めれば対象になると考えていいのか。
- 渡部 そうなります。
- 庄子 240日を求めたのは財務省への予算要求のため。日数は減らした。(子ども教室)
- 渡部 70人になったら、二つに分けなさいという指示がある。(児童クラブ)
- 庄子 児童クラブでは施設に限界。70人というのは難しい。学校を建設する際には、余裕教室をつくる建て方はしていない。厳しい制限をしている。国庫補助が厳しくなっている。

- 渡部 補正対象で歓迎。教室開催できずとも次年度開催できるならコーディネータ費用について補助対象とするとの発表があった。
- 庄子 やる気を起こさせ、人をつないだ。それをきってしまったら人が離れる。年度途中からでも継続の動きを進めることが必要。文科省も地方自治体も対処する必要がある。その要求を我々が行っていく必要がある。
- 宮崎 渡部さんの情報はどうやって手に入れたのか。
- 渡部 全国へ向けて全国放送。補正予算案について文書で流れている。
- 矢吹 2月の終わりまでに国の情報を流すと言っている。学校が言うことを聞かないから小中局長名を入れた文書を用意している。3月中旬頃までには出るだろう。
- 問題なのは、今までは教育委員会で進めていたもの。教育委員会によってはノウハウを利用しようとする。市教委でやりにくいところには与えない。
- 運営協議会に入る努力をしてくれと言っている。3年間で自立できる力を蓄えてくれという前提で動いている。実費負担で続ける、NPO 的な組織を作る、そんなことを工夫する必要がある。
- 予算がゼロでも継続するのは美しい話だと思う。団体の力はある。
- 庄子 市民団体の持っている力を生かすという意識を行政がもつことが必要。行政だけでやろうとするから何もできない。十分に使うこと、上手に使うことを教えて生きたい。仙台市教委をモデルに要求している。
- 矢吹 融合教室だけでなく、仙台市の教室もあわせて、活動をしている。
- 庄子 教育委員会には金はない。でも、施設の提供をします。皆さんがやるなら支援をしますという姿勢を引き出したい。
- 渡邊 富士宮市では、3つの子ども教室がある。互いの連携は何もない。(行政、ゆうごう、ボーイスカウト)。もう一歩進めていくことが必要。県の担当者が理解していないのが原因と考えている。
- 矢吹 土曜日に補習授業として使えという意図がある。今までの地域子ども教室とは意識が違う。地域の実態に応じてやれというふうになるだろう。平日といていたのが土日へと変化したのはその辺。ちょっと不安。
- 渡邊 月に1万円をもらって運営している。放課後児童クラブ。富士宮。放課後児童クラブの取り組みを頑張りたい。
- 矢吹 月1万円を出すことに抵抗は無いのか。
- 庄子 福岡市では児童クラブを無料で開催するという市長の提案。市議会では否決した。児童クラブについては福祉という面でもらえ、そちらで動くという雰囲気がある。教育委員会の金の取り方は下手くそである。
- 渡部 子ども教室は一般財源。児童クラブは厚生年金からくる特別財源。金の流れが違うのはそこになる。
- 矢吹 今日育委員会が主導してという意識があるが、負けてしまっている現状がある。
- 崎 さわやか福祉財団は手を引くとのことだ。子供会は8割に縮小するが継続する。やっている人が増えたことで実績ができた。ガール、ボーイはそういったことはやらない。
- 城 県と市で割り当てをもつ。県が却下、市が却下。下からやりたいといえれば取り上げるかも知れないよという話を聞いた。いろいろ変わってきてますよね。
- 渡邊 市が予算が取れないと県は動けない。市の担当者は県が出さないというけど、まず動くの

は市の担当が動くことから始まる。

庄子 実践したものが押し上げていく。

城 今までやっていた団体には支援できないといわれたが。

庄子 市が団体に委託できるようになっている。

渡部 備品購入を認める。新規でなくても OK。

城 教室でなくてもいいのか。

渡部 場所は、どちらでもいいといっている。

矢吹 行政と手を組める教室は存続できる。

庄子 各教育委員会に対して、呼びかけを運営協議会として流そうと考えた。方向を聞くと教育委員会と上手くいっていないのでという声もあった。それでやめた。でもやるべきだったと今でも思っている。教委が市民団体と一緒にやるのが大事だが、待っていても動かない。こちらから働きかけて、動かすことも必要。

渡部 お金が欲しいから動こうとしているのか、教室としての形に残していこうとして考えているのか。公的な動きとして認めさせることを第一義的に考えている。

庄子 子どもたちを守ろうとしている。これまで、地域の力を結集したものを、なくしてしまうのはなんとももったいないことである。これを続けるには学校の力が必要。それならば教育委員会が学校側に呼びかけて欲しいということを伝えたい。

野澤 保護者からの質問があった。情報が早く伝わる。

庄子 私たちがそれぞれの立場で努力を継続することが大事。というまとめで進みたい。

地域子ども教室の継続について

庄子 多くの教室が継続の声が届いた。費用は受益者負担で行うという声が上がったのは素晴らしいと感じている。地方教育委員会との接触の仕方とを重ね合わせながら、どうせやるなら楽しく、楽をしてやりたい。35が40くらいに増えとうれしい。

渡邊 大学生から補助金が無くてもやりたいという声がある。チャレンジ教室、党派継続する。

安全を守る活動は学校で続けて欲しいとのこと。学童保育と連携する、困っていればその分を我々が受け止めるという相談をしている。行政の力は必要なので、仕方なく行政と連携をしています。

車 今までのことを続けられればいい。多少へそくりもしている。気になっているのは、文科省の名前が取れるが、融合研の名前をどうしているのか、方針については決まっていないがどうか。

庄子 運営委員会の中で決めていこうと考えている。考え方として融合研としては側面からの支援という形になると思う。

車 各サークルの意識が変わった。学校を使って活動するというのはどういうことかということが、2年間の中で変わってきた。現役の PTA はいないが、サークルには現役 PTA が、土日の人が多かった。飲んでいただけの人がたまにいる。放課後、コミュニティの方たちが子どもたちを見てくれているという意識。理解が深まった。

庄子 子ども会が強く残っているところと、そうでないところの違い。地域子ども教室とのつながりはどうなったか。

三嶋 子供会が壊れてきているところもある。逆に縛りがなくなったのなら、やりたいことをやろう。原点にもどる、こうしていきたいという意識をもっている有志と一生にかかってしまうかと考えて

いる。次第に、広げていければいい。子供会の中でふれていければいいと思う。

藤尾 子供会は子どもが少ない。子ども教室だといろんなところへ声かけられる。現役はいやがっているの、段取りを組んで関わられるおばさんたちが便利。

村上 子供会は活動しているが、行事をこなさなくては終わっている。進展がないののどうかと思っている。子ども教室があるのは羨ましいと思う。地域性があるかと思う。学校との壁を感じる。

岸 それぞれの地域課題をそれぞれが考えていく。社会教育の課題。子どもだけでなく高齢化社会も課題。家庭や子どもを顧みない団塊の世代。女性がいいが粗大ごみのおじさんたちはどうするか。実働者。屁理屈というのは退職教員。地域の住民として取り込んでいくのが大切。秋津、具体的に年代の人々が分かる。地域総体の力をあげる。ノーマライゼーションの意識と考える。55歳から60歳が1280万人いる。0歳から10歳の子どもの数と一緒に1260万人。子どもと1対1対応ができる。そうした観点から、地域においてなくてはならないものとしての子ども教室を存在させる。意図的に実働部隊として退職教員を含めて行く。研修会のようなものを考えていく必要がある。

城 地域に戻る・・・というお金がなくて、60歳を超えても働かなくてはならない。

岸 企業における定年を延ばす。一般給料で5年間会社へ。意識は現役のまま。

庄子 子どもの居場所づくりは大人の居場所づくり。人のためでない、自分のため。それが学社融合を進めるポイントになるのではないかと考えている。

運営委員会記録

翌日(3月11日)に、引き続いて運営委員会が開催されました。今後のことを含めて、様々な観点からの話し合いが行われました。

(挨拶)

庄子 総括会議をやってよかった。今後の後しまつをどうするかを考えていきたい。

宮崎 融合研活動を整理する必要がある。国民全部が引きこもりになっているようで気になる。学校の教員は学校から出ない、企業人も会社から出ない、PTAの役員をみても30代、40代に男性はほとんど出ていない。60才に間も無い人は地域と一緒にやっていた。後継者が出てこない。自分の殻に。その中で地域に出よう、混ざり合おうと、そういう融合研の思いがある。

(協議)

実績報告

庄子 ・報告書、160ページ。原稿そろい、校正に。今月中に届けることができる。年度内に処理の完了を目指したい。

・各教室の予算の執行状況。予算残額、0として経理完了が見込める。心配ない。本部経費。現在のところ、会議費の支払い等、まだ終了していない。収入支出面、報告書で300万かかる。22、3万の残のみ。1月から3月までの賃金分。振り向けて収支ゼロ。確定後、報告。承認をお願いする。

・各教室からの事務日誌の報告について、9月に一度整理したことが功を奏した。

・現在、数箇所からあがっている報告は訂正の必要なし。

・文部科学省への報告。15日で報告。野澤からまとめて報告。

庄子 残務処理を依頼。村上さんをお願いしてある。4月は実行処理で体制を整えたい。

電話も使用する。

各教室への挨拶について、はどうか。宮崎会長と連名で。

- 種田 挨拶は、やはり書面が良いと思う。
- 岸 庄子さんの声と話、映像も含めて行いたい。
- 庄子 会計書類等について、保管を必要とするが、どうするか。
仙台に残すことにする。
- 宮崎 筋は、融合研の事務局。実際的には、仙台に残すことになる。事務局長の手元に残す方向で整理をしたい。
- 庄子 融合研活動に大きなインパクトを与えたことは間違いない。

事務局の活動について

- 庄子 今後の活動にどう生かしたらいいか、意見を。
- 宮崎 報告書の発行部数について。子ども教室に関わらなかった会員へ送ることはできるか。
- 庄子 融合研のHPへデータを貼り付ける方法で示す。
- 岸 ブログの活用については。
- 庄子 齋藤さんに依頼して存続する方向で協力要請をする。
- 佐竹 メーリングリストは、事務処理終了後解散で良いですね。
- 庄子 島根フォーラムで子ども教室の生かし方は。
- 雅子 話は出ていた。具体的にはまだ決まっていない。
- 庄子 19年度も頑張っている教室を紹介する場などがあるといい刺激になるのではないか。
- 雅子 島根では子どもたちの活動の場を出している。それに絡めていければいいと思う。県の生涯学習課長、澤さんが代表。役員会で話す。
- 矢吹 融合研でやったことの検証。これからやっていくメッセージを発信することは意義あり。これから先、どうするかを考えていくことは大事。
- 宮崎 会議は総括したが、融合研として総括が必要。他の子ども教室の方たちへの広げもあり、融合研の会員への伝え方も必要。
- 庄子 本部に要望して、結論を出したい。
- 佐竹 ゆうごうという言葉を残すことの是非。各教室が融合研の事業として行っているという示しが必要かどうか。
- 藤尾 融合研と子ども教室とが融合する。無理にではなく、会員の方へいかがですか。情報交換会はフォーラム等で続けていきますよ。会費は一年分は免除。ジョイントする手立てを講じることが必要ではないか。
- 宮崎 アフターケアをしていく。ブログを残していく。とることがいいというより、残す方がいいのではないか。
- 雅子 子ども教室が市町村と一緒にやるときは邪魔にならないか。
- 藤尾 無理にではなく、融合研として関わっていく道を用意する。その人が選ぶ道を、選択肢を用意することを考えていけばいいのではないか。
- 矢吹 支部の関わり方、その立場同士で整理できるのではないか。
- 岸 組織を立ち上げる。秋津の登録団体とすれば、コミュニティ委員として入れていく工夫。本事業は平成17年度より受けた融合教育研究会により、平成18年度で限度として終了。
- 佐竹 説明責任として必要。

- 庄子 融合研の中でも、事業ごとにグループ活動的になっている。融合研の中に、事務局にあると活性化できるかなと考えているが、どうか。
- 矢吹 子ども教室の提案の仕方。
- 野澤 各教室に対して。説明責任、ゆうごうの使い方、融合研への誘い込み。
- 庄子 10月のフォーラムはゆうごう教室同士のつながりを生み出す効果があった。各教室のリーダーを孤立させないという方向で考えたい。
- 雅子 代表者が会員でない教室ところもある。事務局として、代表者は誰かをしらせてもらえば融合研として一緒にやらないかという誘いができる。(雅子さんへ知らせる。)
- 庄子 良い印象を残して終えたい。そのための総括会議を考えた。
- 矢吹 融合もひとつの方法論。読書とか親父の会とかと同等のものとして考えていた。
- 庄子 メーリングリストを1年間提供します。その中で子ども教室の動きも取り入れていきます。2年目には、会員としてなってください。

〔閉会挨拶〕

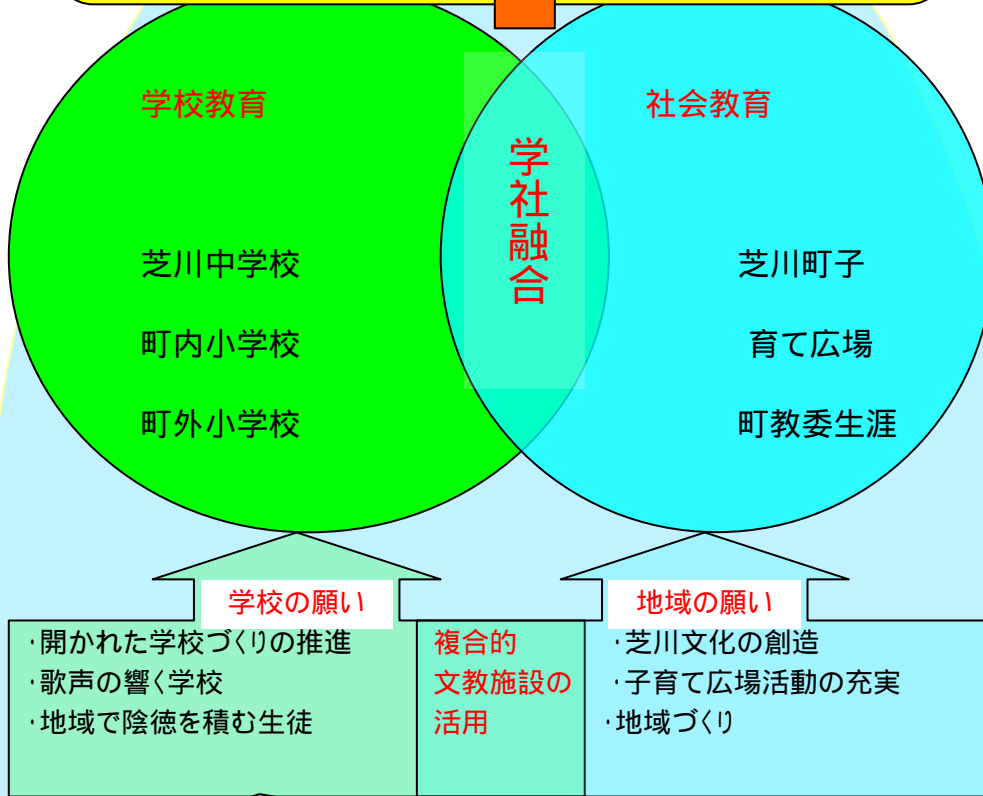
- 種田 庄子さんにライフワークとして持ち続けていただきたい。仙台を引っ張っていただきたい。民間の人間、目的達成型と調整型の違いを感じた。目的達成型のものとして考えていただきたい。

2 10周年記念事業から

融合研は、2007年8月が設立して満10年になります。そこで、この1年間を「融合研設立10周年を記念する年」と位置づけて、一層活発な活動を繰り広げたいと考えて、各地でのイベント等にも「融合研設立10周年記念」という冠をつけて実施していただくようにしました。その第1回(仙台市)、第2回(芝川町)、第3回(厚木市)が、終了しました。第1回の詳細につきましては前号でお知らせしましたので、ここでは、第2回と第3回の詳細をお知らせ致します。

融合研設立10周年記念事業「芝川町オペレッタ～かぐや姫～」

オペラを作ろう2006・オペラ『かぐや姫』
芝川町はじめての学社融合



学校の取組

学社融合についての研修会実施(平成17年度)

教育課程への位置づけ(平成18年度)

- ・選択音楽、選択美術、選択技術・家庭、国語
- ・総合的な学習の時間を使ってのオリエンテーション
- ・キャリア教育

会員 139 渡邊 喜久(静岡県富士宮市)

オペラ「かぐや姫」の主役を演じて(芝川中学校2年 三浦真琳^{まりん})

私は昨年、芝川町で行われたオペラ「かぐや姫」のかぐや姫として出演しました。私がこのオペラと出会ったのは昨年の五月のことで、総合的な学習の時間に行われたオペラに関するオリエンテーションでした。オペラは総合芸術なので、歌い手だけでは成り立ちません。舞台監督、照明、美術などさまざまな方々の力を結集してはじめてできあがるという学びました。それぞれのプロの方々から仕事の内容と分がその道で生きてきたかを話していただきました。に興味のなかった私でしたが、話を聞いているうちに、をやってみたくくなりました。

でも私には大勢の人の前で歌う覚悟などなく、歌いどありませんでした。オペラに参加するかどうか何日でしたが、その気持ちよりもオペラをやりたい気持ちずっと強かったので参加しようと決めました。そして、に指導してくれた先生方はみなさん素晴らしい方々で、に仲間と協力して大きいものをつくる楽しさを教えてくれました。

練習は、水曜日で、オペラに取り組むために、学校は部活動中止の日になっていたので部活動の吹奏楽部のことは何も気にせずに思い切って参加することができました。練習は毎回楽しくて、毎週水曜日の練習をととても楽しみにしていました。

あっという間に12月になり、本番を迎え、多くの方々が鑑賞に訪れてくれ大成功のうちに公演は終了しました。5月のあの日、勇気をもってオペラに参加して本当によかったと心から思いました。

このオペラの活動で、私は私の夢に一步近づくことができました。そして本番にむかって一緒にがんばってきた仲間と流した涙とお客さんからの熱い拍手は、私の心に残る大切な宝物になりました。

何よりもうれしかったのは、素人の私にも人に夢を与えたり、感動させることが出来たということです。そして、こんな素晴らしいオペラになったのもほかのキャスト、先生方、私を支えてくれた地域の方々や家族、友達のおかげです。私はこの方たちに心から感謝し、心から拍手を送りたいと思います。そして、かぐや姫としてがんばった自分にも拍手を送りたいと思います。

私たちの学校教育目標は、「夢と希望を持ち、可能性に挑む生徒」です。合い言葉は、「夢・新しい挑戦をする学校」で、校長先生が大きな看板もつくってくれ、いつも私たちはそれをみて「よーし、夢に挑戦するぞ！」という気持ちになります。今回のオペラは校長先生の夢の挑戦でもあったような気がします。

学社融合 芝川町立芝川中学校の挑戦(校長 渡邊喜久)

平成17年4月、私は10年間勤務した富士宮市教育委員会生涯学習課から隣町の芝川中学校に赴任しました。芝川中学校は、私が新採時に7年間勤務した学校であり、退職までにもう一度勤めてみたい学校でした。

人事異動のかなり前かかっていましたが、平成2月、芝川中学校の敷公民館と学校の一部施設された文教施設「くれいど楽」の完成が予定されていた。一部施設とは、中学堂を兼ねた文化ホールとン室です。富士宮市では、社融合を手立てとした生



の推進に力を注いできました。その経験をこの地なら生かせると思いました。今までは行政の立場から学社融合を進めてきましたが、これからが学校に軸足を置いて融合を進めることができると考えただけでその思いは、日増しに膨らんでいきました。今回は、その中の一つの取り組みであるオペラ「かぐや姫」について報告します。

ことを
なぜ自
オペラ
オペラ

自信な
も悩み
の方が
私たち
私たち

ら わ
成 1 8
地内に
が複合
る・芝
いまし
校の講
パソコ
私は学
涯学習

本校は男女を問わず歌うことが好きな生徒が多く、一日中美しい歌声が響く学校です。オペラ「かぐや姫」の上演は、この歌声を学校だけでなく、地域の方々にも届けたいという学校の思いと、学校の講堂を兼ねた「くれいどる芝楽」の文化ホールを拠点とした新しい芝川文化を創造したいという地域の方々の思いが重なり実現した。芝川町は竹林を中心とした豊かな自然に恵まれた人口一万人の小さな町です。この竹にまつわる地域の伝説を題材にしたオペラ「かぐや姫」は、まさに芝川文化そのものであり、演目を決めるのに時間はかかりませんでした。

平成17年10月、青少年健全育成に取り組んでいる二つの地域ボランティアの団体代表、学校、卒業生、教育委員会社会教育担当で、オペラ「かぐや姫」制作実行委員会を立ち上げ、準備に取りかかりました。

学校は、平成18年度の教育課程編成において、希望者全員が部活動を気にすることなく参加できるように週日課を変更し、水曜日を部活動中止にして練習日としました。また、校内研修では、自分の担当教科としてこのオペラとどのような学社融合ができるかを考え、それを年間指導計画に位置づけるようにしました。選択音楽科ではコーラス担当、選択家庭科では衣装制作、技術科では小道具・大道具づくりなどを通して融合を図ることになりました。さらに、実行委員会の代表が企画について職員会議で話す機会や校内に実行委員が自由に活動できる場を確保しました。

実行委員会は、まず公募で本事業への賛同者を募ることにしました。学童保育関係者、PTA、大工さん、僧侶、カメラマン、教職員、高校のボランティアクラブなど60人近くが集まり、順調にスタートを切ることができました。

指導者は、音楽、照明、美術、舞台監督のプロの方々(舞台の達人)です。この企画に賛同していただいた方で、普段はオペラをはじめとする公演を手がけている人たちです。

活動は今年の五月から始まりました。初日は、総合的な学習の時間を使って、舞台の達人達による四部門の紹介が行われ、生徒はそれを聞いて自分がやってみたい部門を選択しました。四部門に応募した生徒は29人、これに小学生、卒業生、地域の大人、選択音楽・技術・家庭の生徒が加わり総勢89人が関わることとなりました。これにスタッフを合わせると150人を越える人たちが、オペラの制作にかかわることになりました。

延べ百時間に及ぶ練習の成果の発表当日、12月9日には、600人を越す方々が町の内外から鑑賞に駆けつけてくれました。「表舞台、裏方共に一生懸命さが伝わってきてとても感動」「小さな町の大きな取り組みに乾杯」「芝川町のパワーがうらやましい」など数々の励ましの言葉をいただきました。隣の市のある中学生は、「同じ中学生があんなに輝いている。今まで非行に走っていた自分がはずかしい。これからの生き方を考え直したい」と感想を書き残しました。

2007年の雑誌「悠」2月号に、岸副会長が本校の取り組みについて次のような記事を載せてくださいました。(原文のまま)

この学社融合は、生徒にとっては授業であると同時に、一緒に取り組む大人にとって「も」社会教育であることが特徴です。

一般的には、授業の関わる大人のことを「学習支援者」や「学校支援ボランティア」などと表現し、学習や学校を「支援する大人」としての「学校が主体者」に位置づけることが普通です。しかし、学社融合では、「大人自身の学び」や「学んだ成果の還元」と捉える「大人『も』学びの主体者＝生涯学習者」とするのです。決して学校や子どものため「だけ」に「奉仕する人」、すなわち「支援者やボランティア」でないのです。(中略)

小さな町の一人ひとりが「主語」をもったデッカイ試みに、私は賞賛の拍手を贈ります。そして、今年も、来年も、そのまた翌年も……と続くならば、芝川町の宝になることは間違いありません。

学校の中の活動は、なかなか地域には見えにくいものです。今回の取り組みは、学校文化と地域文化との融合を実現させたことが最大の収穫です。これまで本校が取り組んできた学社融合が素晴らしい形で具現化し、学校としても大きな自信と勇気をいただいたと思っています。地域の人たちの生徒を見る目にも変化がありましたし、なによりも生徒たち自身が生き生きしてきました。

先日、この本校の取り組みが、富士宮ロータリークラブ杯を受賞しました。この賞は、

富士宮・芝川地区の中学校13校の中で、文化面で立派な活動をしている学校に送られる
ものです。当日、会長は「プロアーティストのほとんどが中学時代での文化活動をきっかけにしている。
素晴らしい文化との出会いを大切に一生の宝として欲しい」という挨拶を述べられました。ここにかかわっ
た生徒たち全てがこれからの人生を心豊かに送るための一つのステップになってくれればと思います。

今日も校長室では、来年度の取り組みについて、実行委員の一人が熱くその思いを語っています。学
校からお願いしたのでもなく、地域がお願いしているわけでもありません。

お互いをよきパートナーとして夢を語り合っているのです。「夢・新しい挑戦をする学校」の取り組みは始
まったばかりです。

融合研設立10周年記念事業「第3回厚木フォーラム」

「第3回学校と地域の融合教育ミニフォーラム in Atsugi」

(兼) 学校と地域の融合教育研究会創立10周年記念事業

プログラム開発から学ぶコーディネーターの役割

～コーディネーターとしての資質を開花させ進化させるために～ を終えて

文責 / 中川 洋太(神奈川支部事務局長)

神奈川県厚木市での「第3回学校と地域の融合教育ミニフォーラム」は、64人もの参加者のもと、
盛大に開催することができました。今年は、今までの運営方法を変え、ワークショップ形式で展開しま
した。学校施設を利用して練習している「ハミングバード」というオカリナ演奏グループに、学社融合
の実践例として、演奏発表をしていただき、花を添えていただきました。

今年のテーマは「コーディネーター」です。

まずは、実施要領から

1 趣 旨

学社、部内、行政内融合・・・融合するためには、コーディネーターの存在は不可欠である。しか
し、多くのコーディネーターは、何をどのように進めていけばいいのかということに悩みながら実
践に当たっているのではないだろうか。そこで、プログラムづくりを体験する中で、コーディネ
ーターとしての役割等を考えるとともに新たなコーディネーターの育成を図ることをねらいとする。

2 主 催 学校と地域の融合教育ミニフォーラム in Atsugi 実行委員会

3 共 催 学校と地域の融合教育研究会

4 後 援 神奈川県教育委員会、厚木市教育委員会、愛川町教育委員会、清川村教育
委員会 厚木愛甲地区小学校長会、厚木愛甲地区中学校長会、厚木市立小校
長会 厚木市立小中学校PTA連絡協議会、厚木市子ども会育成連絡協議会、
厚木市青少年指導員連絡協議会、厚木市母親クラブ連絡協議会、厚木市青少
年健全育成連絡協議会、愛川町PTA連絡協議会、清川村PTA連絡協議会

5 開催日時 平成19年2月10日(土)13:00～16:50

6 会 場 厚木市ヤングコミュニティセンター5F

7 当日のプログラム

お 迎 え リラックスタイム by ハミングバード(友情出演)

開会挨拶 13:00～13:03 神奈川支部長 青木 信二

発 表 13:03～13:10 2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野

応援メロディ「輝く君へ」 by ハミングバード

基調講演 13:10～13:55 全国の学社融合事例

記者の目から見た融合によって生み出されたもの

講師: 矢吹 正徳(学校と地域の融合教育研究会会員・日本教育新聞)

プログラムシートの作成方法について、アイスブレイキング

13:55 ~ 14:05 神奈川支部事務局長 中川 洋太 山田 淳司

グループに分かれてのプログラムシートづくり(休憩はグループ毎)

14:15 ~ 15:15

部屋ごとのプログラムシートづくり

15:15 ~ 16:00

グループに分かれてのプログラムシートづくりのまとめ

16:00-16:20

ファシリテーター	
1A 五十嵐 徹	2A 大谷 京司
3A 倉澤 良一	4B 清水 良
5B 渡井 悦子	6B 坂口 雅志
7C 持丸 茂樹	8C 山田 淳司
9C 青木 信二	

A 岸 裕司	B 越田 幸洋	C 宮崎 稔
--------	---------	--------

全体会 16:20 ~ 16:35 グループ報告

講評 16:35 ~ 16:45 永谷 貴弘(学校と地域の融合教育研究会プログラム研究開発委員会委員長)

閉会挨拶 16:45 ~ 16:50 宮崎 稔(学校と地域の融合教育研究会会長)

フォーラム開催に向けてのこだわり

研究会(フォーラム)に「研修」色をだして運営する方法もあるのではないかと、ある意味、「運営方法の提案」を含んで開催することとした。

1 事前の実行委員会こそ、最大の「学びの場」である

今回の実行委員会は、前2回を運営方法の検討にあて、後の2回でワークショップを運営していくための方法について議論を進めた。とりわけ、あとの2回では、ワークショップで使用するシートの形式検討から、参加者の意見を引き出す(どの参加者にも満足していただくために)ためにはどうしたらよいか、初対面の人たちをどうやったら数時間の間にリラックスして話し合える状態にできるか、グループ分けはどのようにしたらよいか等を話し合った。仕事を離れているとはいえ、あまりにもまじめな、仕事以上の議論であったため、実行委員会が終わるたびにぐったりであった。

2 実行委員会は、「仲間づくりの場」である

実行委員は仲間づくりを最優先するため、「実行委員会」ありきではなく、「アレの会」ありきとして参加するのがこれまでの常であったが、今回は「本気の実行委員会」ありきであった。初めて参加していただいた方からは、正直いって「えーこの会ってどういう会なの。変なところに足を踏み入れてしまった」と感想をもらった。しかし「アレの会」は必ず行い、もちろん仲間づくりに励んだ。

3 発表者・参加者は、幅広い団体等の範囲に声をかけた

「発表することが自信につながり、活動がさらに活性化する」「参加してもらうことが、同志を増やすことにつながる」ということを最大の信念として声かけを行う。そのためには、多方面からの後援申請をとる。従って、動員はかけない。先生の参加が多いのはこの努力があってこそである。

今年のプロローグは「ハミングバード」

2005年長野県で行われた障害のある方々が活躍されるオリンピック世界大会(スペシャルオリンピックス冬季世界大会)。この大会のテーマソング「輝く君へ」を作ったのが、森の里在住でオカリナグループ「ハミングバード」のリーダー竹林さん。普段は、学校の施設(余裕教室)を使って練習をされている。もちろん授業でもひっぱりだこ。まさに学社融合の実践者。ゆっくり演奏を聞きたいが、時間があまりとれない。そこで、開会前を「リラックスタイム」として友情出演という形で演奏してもら

い、開会後は正式に発表者として演奏してもらうことにした。苦肉の策である。一緒にバレーボールをやっただけに、「お願い」「いいよ」の関係で簡単に進められて良かった。オカリナや他の楽器の音色は心にしみいり、リラックスする気持ちをもてたのではないかと思っている。

基調講演 全国の学社融合事例 記者の目から見た融合によって生み出されたもの

講師として学校と地域の融合教育研究会会員であり日本教育新聞の記者である矢吹正徳氏に、基調講演をいただく。講演内容は本日のテーマ「コーディネーター」にあわせて事例を交えながら、参加者にこれからはじまるワークショップに向けての視点を注入していただいた。

【青木 信二】

下手な開会の挨拶のあと、軽快なオカリナの演奏に感動し余韻が残っている会場を、矢吹さんの相変わらずの独特な視点(少なくとも私とは違った視点)で捉えた基調講演には、いつの間にか会場全体が引き込まれていきました。基調講演はフォーラムの進展に影響すると言われます。しかも今回の第3回ミニフォーラムは今までのフォーラムと違い、参加者と一緒にワークショップを展開するという試みでしたので、参加者が引いてしまうのではと少し心配していたのですが、「さすが、矢吹さん」その悩みも吹っ飛んでしまいました。その基調講演は、コーディネーターになる可能性の人がこんなに身近なところにいたなんて…から始まり、コーディネーターに必要な能力とは…など、会場の皆さんに問いかけながらの展開となりました。かなり考慮なされたなと感心しながら、自分の実践と照らし合わせ、「子どもと関わり方能力」という言葉には鳥肌が立ちました。次は、私もこの言葉を実践で使わせていただきます。詳しくは、ぜひ読者も地域の講演に講師として「矢吹さんと呼ぶべし」でしょう。

矢吹さん、どうもありがとうございました。

ワークシートづくりとアイスブレイキング

ワークシートのつくりかたをどのように説明していくか、寸劇風にしたらどうかということ、実行委員会の雑談の中から生まれた。3週間前に寸劇方式でいくことになり、4日前にシートづくりの10カ条を取り入れて2部構成することにして、前日に「融合」と「コーディネーター」の説明も取り入れることにして3部構成で実施した。若者に流行の芸人風に、スケッチブックや札を取り入れながら取り組もうといろいろ欲張って自滅。アイスブレイキングは、厚木市教育研究所で「コミュニケーションづくりのプログラム集」を作成している担当者がそのノウハウを生かし「魔法のフラフープ」を実施。どのグループも、下におろすはずのフラフープがなぜか意志とは正反対の上へ上がっていき、びっくりぎょうてん。ゲームは、もう一つ用意してあったが、進行時間を見ながら減らしたのはさ・す・が。

【佐々木 徹】

ワークシートの説明を短時間で参加者に理解してもらうにはどうすれば良いか。言葉でレジュメの内容説明をするにはなかなかピンと来ない。フォーラムの前の実行委員会でそんな疑問をもち、参加者が日頃感じていることをと閃き、雑談の中で寸劇を投げ掛けてみました。厚木の大根役者(「大きな根っこの役者さん」と呼んでください。)の寸劇によって、プログラムシートのイメージがかなり膨らんではないかと思えます。

「魔法のフラフープ」はプロジェクトアドベンチャー(PA)プログラム感覚で子どもたちも大人も使えるゲームです。時間をじっくりとって、どうして意志と反対に働くのかを、グループみんなで考えて見るのも楽しいかも…。

【五十嵐 徹】

中間発表までは、世代間ギャップなどの地域が抱える課題を中心にした意見交換でした。ワークシートそっちのけで熱い意見がたくさん出されていました。高齢者の孤立、団塊世代と団塊 Jr 世代のギャップ、昼間地域にいる人はだれ？、コミュニティーに巻き込めない人、子どものいない若者の存在、などなど、中間発表でその様子を話したところ「世代間ギャップを埋める方法にはスポーツがあるよ」との意見をもらったこともあり、後半は「地域と学校が運動会をいっしょに開けないか？」をテーマに意見を出し合いました。ワークシートに沿ってというよりは、思いついた意見をみんなで出し合い、キーワードになりそうなことを付箋に書きとめ、ワークシートの関連がありそうな辺りに貼っていきました。出来上がったシートは、ばらばらに貼られた付箋を整理してみたらこうなりましたというものです。

このワークをやって感じたことは、前半はシートの項目とは直接関係がない意見交換だったのですが、実はその意見交換がシートを作るうえでとても大切なものだったということに気がつきました。シートを作る前に一人ひとりがどんな思いを持っているのか、どんな課題を感じているのかを率直に出し合い共有する時間。何か計画を立てるときには不可欠なことだなとあたりまえのことに気がつかされました。そんなわけで後半の学校と地域の運動会づくりのいろいろな意見、アイデアは短い時間でスムーズに出てきました。時間の関係で中途半端なところもありますが、この後もう一度話し合うことができればより良い融合シートが出来上がるんだろうなと思っています。

いろいろな視点からたくさん意見を出してくれた1班の参加者の皆さんに感謝です。

グループワークと部屋別ワーク

実行委員会で長時間に話し合ってきた運営方法。フォーラム終了後、どのファシリテーターも、誰一人として、うまく事前にシミュレーションできなかつたと判明。思い返せば、本番の午前中、ファシリテーターの打ち合わせが終わってから、こそこそ集まっては「どうやって進める」というシーンも多く、いつのまにか話し合いの輪ができていた。そんな中、一人だけ「二日酔い」と言って寝ていた大物の存在あり。でも、始まってしまえば、さすが実践のプロ。参加者を上手くリード。

部屋ごとの発表会の設定は、実に効果大。「どうせできない」「もう、無理」とあきらめていたグループも、他の発表を聞いて俄然奮起。その後戻ったグループの話し合いが充実したこと。グループ・部屋での活動時間の設定は当初決めてあったが、ファシリテーターにまかせたため、まちまちとなる。すぐにグループに戻った部屋もあれば、ぎりぎりまで他のグループの人との意見交換を重視する部屋もあり。どちらの運営も甲乙つけられないくらい充実していた。

【山田 淳司】

むむ、となりのグループはジャンケンで記録係と発表者を決めているな。さて、我が 8 班はと…。立候補がいなかった場合の仕込みはバッチリ。机の裏に記録係、発表者と書いたシールを貼っておきました。手で探り、シールがあった人がビンゴです。これがまた、班の方たちには受けがよく、さらには適材適所となったわけです。ファシリテーターの進行はしどろもどろでしたが、メンバーの話し合いははるかに次元が高くユニークなものでした。テーマは「お葬式」。何よりも良かったのが、初

【田淵 栄一】

全体で行われた、魔法のフラフープ。あんなに軽いものが、大人5人で床におろすことがなかなかできない。おろそう、おろそうと思うと余計に上がってしまう。結局、時間もなく下ろすことができなかった。知らないもの同士だったが何とかしようという一体感が生まれ、ぐっと引き込まれた。まさにこれがコーディネーターの役割なのかなと思う。

そして各部屋に分かれてのグループごとのプログラムシート作り。まずは自己紹介から始まり、テーマの検討。今、話題の食育について。プログラムシートに基づき、それぞれの意見をまとめる。グループ内には様々な職種や役職の方がいて、いろいろな意見が出た。しかし時間が足りずシートは完成していないが部屋ごとにグループ発表。グループにより進み具合は違うが、テーマ、意見は様々なものがあった。グループごとの発表の後にもいろいろな意見が出る。コーディネーターの10カ条を思い、実践を積み重ねることが必要と思った。

全体会と講評

岸さん・越田さん・宮崎さんに部屋ごとの発表をしてもらうことにしたのが4日前。さすが、3人は実行委員の意図している気持ちをくんでの報告。「時間が少なくてすみません」ただ、ただ、それだけ。でも、3人の名前がレジメに並んで、実行委員にとっては参加者に対して鼻が高い。まともは、永谷プログラム研究開発委員長。これまた後で聞いた話だが、コーディネーター10カ条らしきものを実は用意されていたらしい。言おうとしていたことを先に言われてしまうことほどつらいものなし。事前に連絡しなくてこれまた「すみません」。でも、これまたさすがは委員長。会全体をしめていただき感謝、感謝。皆さんに支えられてのフォーラムこれにて終了。

【坂口 雅司】

いろいろな会合で特定の人ばかりが発言し、大半が聞き手に回っている光景をよく目にする。ありがたいことに、融合研のフォーラムではその心配は全く無い。それどころか何処で発言を中断しようかと悩むほどである。全体会でも話が出ていた通り、意見交換をする時間の方が長く、気がつくとう発表の時間が来ていたというグループが私のグループを含め多かったです。全体としては充実したグループ討議が行われたのではないでしょう。

「未完成」は「未来に完成するもの」と考え、未完成のプログラムは、各自地域で再検討し、新たな融合の芽として芽吹く日が来るのを期待したい。

参加者からの感想 + おまけ

< 感想 > 融合研MLの投稿やその他のメール等より

今回は、フォーラム終了後も、グループ全員でメールアドレスを交換し情報交換をしあっているグループや、他市の方とメールでやりとりを続けるようになったというような報告も聞いている。

2月10日のミニフォーラムありがとうございました。いろいろな立場の人が、本音で語り合っていて、少々毒気（個性というべきでしょうか・・・）に中てられた感がありました。とてもおもしろいグループでの話し合いでした。

第3回のテーマは「プログラム開発から学ぶコーディネーターの役割」でした。ここまで特化した融合研フォーラムは類のないものです。大きな期待と、ちょっとした不安を抱いて臨みました。

まずは、“ちょっとした不安”が的中。第2回目までは、会場満杯の厚木フォーラムでしたが今回は、会場の半分だけに椅子が並べられていました。イベントから研修へと、量から質へと変化させた影響でしょうか。しかし、次第に埋まっていく座席には馴染みの厚木の方々の顔が多くありました。

集めた人ではなく、集まってきた人たちであることが分かりました。そのあたりで、“ちょっとした不安”は全く消え“大きな期待”だけになりました。青木信二支部長の開会あいさつのは、発表でした。ハミングバード（オカリナの演奏サークル）の演奏です。なぜこれが「発表？」と思いました。謎は、代表の方の活動説明で解けました。森の里小学校をサークル活動の場所として使い1年生から6年生のまでの音楽の授業に関わっているというのです。う～ん、確かに発表だ。その上、心がさわやかになる演奏。厚木のフォーラムは、毎回驚くような仕掛けが冒頭に用意されています。だから、いろいろあっても、厚木にはやはり来てしまいます。

2番目の研修は、会員でもある日本教育新聞社の矢吹正徳さんの講演。すごく良かったです。「さまざまところで活躍するコーディネーターにあたる人材を洗い出してみましよう」会場から出された人材の名称は数多くありました。コーディネーターする立場にいる人が、世の中にたくさんいるんだなあと思いました。今まで、その役割が何かが見えなかったのが、今回は大発見！ 感謝です。そうそう、矢吹さん、帰りの電車の中

で、もう一つ大発見しました。子どもを地域や学校と結ぶ最大のコーディネーターについてです。それは「親」だと思うのです。会場で思いつかなくてすみません。

3番目が、いよいよ今回のフォーラムの核心部分。プログラム開発です。結果としては、完成をみたプログラムは少なかったようですがプログラム開発のノウハウと開発を協働するすばらしさを体感できました。私の所属した班にいた学校の先生が「地域の方とこういうふうに話し合えたら、もっとよい教育ができますね」とおっしゃっていました。草むしりでも何でもやって、先生方にそうするゆとりを作っておけることが学社融合のスタートなのだと改めて思いました。「教員の負担軽減は重要な学社融合、そして結果として子どものため」とは、鹿沼北光クラブから学んだことでしたが今回の研修で、その認識をさらに深めることができました。

研修終了後にHARIU文庫「キャリア教育による自分づくりの実践 融合フォーラム in 仙台より」「自分づくり教育」研究グループ研究紀要「働くことの意義を重視した子どもたちの職業観育成」を購入して、帰路につきました。電車の中で読みふけてしまいました。キャリア教育のことはもちろんですが、学社融合の方向性、現状、課題も読み取れる実践報告です。みなさんもぜひお読みになるといいと思います。野澤副会長が取り扱っていました。

それから、今回の厚木フォーラムに参加できなかった方々はプログラム開発シートだけでも手に入れるといいですよ。“完成した”とは言えませんが、実践にはとても役立つシートです。神奈川支部にお願いすれば譲ってもらえると思います。最後に、厚木、神奈川のみなさん、お世話になりました。

学ぶところ、得るところがたくさんありました。やはり参加してよかったと思います。

新しいフォーラムの形を見せていただき、体験させてもらい大いに刺激を受けて帰ってきました。ありがとうございました。最初のところは間に合わなかったのですが、矢吹さんの講演から参加させてもらいました（全国を知っている矢吹さんならではの話でこれもとても良かったです）。私たちが取り組んできた学社融合を一步前に進めるための提案として、とても貴重なものだったと思います。融合研の今後のあり方にも、大いに影響を及ぼしそうな、そんな厚木フォーラムでした。それにしても、厚木は着実に人のつながりが深まっていますよね。9つのワークショップのグループをリードするファシリテーターが厚木の地元いらっしゃるんですから。さらに、学校関係者も多く参加していたことを考えると、これから益々楽しみですね。 よーし、仙台も頑張るぞって、勇気が湧いてきました。

土曜日はありがとうございました。沢山勉強させていただきました。何より実行委員の皆さんが

楽しそうに運営されていたことが感動的でした。最近自分自身に笑いがなくなっていることを反省しました。

今回のフォーラムは、ミニフォーラムの原点に返ってのワンテーマでじっくりと考えあうという点で、とても良かったと思います。私は、ちょっと調子に乗りすぎてしまいましたが、それだけ居心地が良かったということでご容赦ください。どこでも使えるプログラムの開発と言うことと、これまでの実践を丁寧に整理するという点で、必要なことだったと思います。これまでやらなければいけないことであったことをしっかりと方向付けて頂けたと言うことから意義があったことと思います。

100の言葉より1の実践。私には実践と呼べるものはないけど、フォーラムで実践を多く持っている人たちに出会うのは本当に勇気付けられます。ありがとうございました。

多少の失敗や行き違いがありましたが、グループ討議はとても楽しく、充実したひと時でした。（もう少し時間が欲しかったです...）グループ討議で隣に座った横浜の方とメールで情報交換をしています。初対面の方ともすぐ仲良くなれるのは、私の唯一の特技？です。市P連を退任してから、他団体の方々と話し合える機会が少なくなり、残念に思っていたので、楽しんで意見交換をしています。

色々なポジションからの実態や意見が聞けることはとても有効な事だと感じました。私はあいにく意見することなくポカ～ンとしているだけでしたがそれだけでも（聞いているだけでも）有意義でした。今回のミニフォーラムのように、できるようで、なかなかできる場はないですね。それを融合していけたら、なお最高ですね。コーディネーターとして担えていけたら素敵ですね。ただただそう感じる一時でした。とにかく今は、色々な方たちの、色々なお声を聞けることがありがたいです。感謝です。そして気負わずいきたいと思います。

<記録>

当日の参加者総数 64 人

(宮城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、神奈川県、東京都、静岡県)

懇親会参加者総数 30 人 宿泊者総数 14 人

実行委員総数 17 人 実行委員会開催総数 5 回(アレの会 5 回)

フォーラム申し込み最初: 千葉県 佐竹様

フォーラム申し込み最後: 当日の駆け込み 4 人

当日キャンセル: 3 人

締め切りを過ぎてからの申し込み: 半数以上

懇親会への差し入れ多数: 送付・お持ち込みいただいたみなさん、ありがとうございました。

【実行委員(良き仲間たち)】

青木 信二(ファシリ:森の里パートナー)

中川 洋太(総務班:厚木市教委)

坂口 雅志(ファシリ:森の里自治連)

佐々木 徹(総務班:厚木市教委)

田淵 栄一(演出:厚木市教委)

山田 淳司(ファシリ:厚木市教委)

五十嵐 徹(ファシリ:湘三教育事務所)

* 以上、融合研神奈川支部会員

清水 良(ファシリ:愛甲教育事務所)

大谷 京司(ファシリ:愛甲教育事務所)

奥田 七代(演出:毛利台パートナー)

渡井 悦子(ファシリ:足柄下教育事務所)

若林 恭子(総務班:厚木市)

細山 信(情報班:市P連協)

井上 裕之(情報班:森の里自治連)

倉澤 良一(ファシリ:大学生)

長沢 祥子(総務班:厚木市教委)

持丸 茂樹(ファシリ:愛川町教委)

【会計報告】

収入 59 人 × 500 円 = 29,500 円

* 参加費代として(ハミングバードのぞく)

14 人 × 12,000 円 = 168,000 円

* 宿泊費代として

16 人 × 5,000 円 = 80,000 円

* 懇親会費代として

合計 277,500 円

支出 22,000 円

(お弁当代、謝礼:実行委員・講師等)

7,500 円

(ビデオテープ等消耗品代)

248,000 円

(七沢荘支払い等)

合計 277,500 円

差引残高 277,500 円 277,500 円 = 0 円

以上、相違ありません 事務局 中川 洋太

3 島根県情報

「第6回綺羅星7フォーラム」の概要

6年間にわたって毎年続けている島根県益田地域の「綺羅星7フォーラム」が今年も盛大に開催されました。島根県は、地域教育コーディネータ制度が今も健在で、その活動の成果もあって、「学社融合」「地域ぐるみの子どもの育成」が盛んです。今回のフォーラムを通してのその登壇者と発表テーマを紹介します。

(なお、詳細が「ネイチャーキッズ寺子屋」のホームページにアップされていますので、詳しくはこちらをご覧ください。ことしの融合フォーラムが島根で開催されますので、また、ビデオや当日のDVDも作成されていますので参加を検討している人はとくによくご覧ください。)

子どもフォーラムの報告書をご覧になるにはAdobe Readerが必要です。また、ビデオを再生するにはWindows Media Playerが必要です。



第6回子どもフォーラムin綺羅星 2007.2.17(土)から18(日)

会場;益田市市民学習センター

フォーラム趣旨

「子ども」に視点をあてたすべての取り組みをとおして、大人のネットワーク化を図る。さらに、将来的には子どもを地域づくりの担い手として、地域づくりに参画する「人材」として位置付けたい。そして、子どもを地域づくりの新たな担い手としてするとともに、子どもの体験するステージ作りが新たなコミュニティづくりの可能性を広げることを情報発信し、さらなる人的交流の場をめざし、本フォーラムを開催する。

日程

[2月17日]

オープニングセレモニー

実践発表

第1分科会「学校外での子どもとの関わりから見えてきたもの」

- 発表者 三浦清一郎(福岡県みやこ町:豊津寺子屋)
「“保教育”と“女性支援”をめざした豊津寺子屋」
森本 精造(福岡県飯塚市:ほなみマナビ塾)
「ほなみマナビ塾とは」
佐々木都 大畑伸幸(島根県益田市:ボランティアハウス)
「学校を子育てandコミュニティの拠点に」
コーディネーター 大島 まな(九州女子短期大学 助教授)

第2分科会「就学前の子ども達との関わりからみえてきたもの」

- 発表者 山本 隆 (沖縄県南風原町:ONE ネットワーク「沖縄自然体験」)
「放課後は子どもの宝物」～「元気にしていく」=「ストレスを越えていく」地域教育～
河野 利文(島根県益田市:豊川保育園)
「保育園が地域を元気にする」～学社融合は保育園から～
市原 悟子(大阪府熊取町:アトム共同保育園)
「気持ちを伝えて気持ちを知る」～めんどくさい人との関係～
コーディネーター 山本 健慈(和歌山大学生涯学習教育研究センター 教授)

第3分科会「融合の発想からみえてきたもの」

- 発表者 澤江 健(島根県津和野町:地域教育コーディネーター)
「つながりから生まれ、広がるまちづくり」
- 岡本 靖史(愛知県名古屋市:親父の休日の会)
「食」でつながる、「食」で楽しむ、お父さん達の休日」
- 湊 照代(岡山県備前市:NPO法人ふれあいサポートちゃていず)
「生涯学習の企画とネットワーキング」
- コーディネータ 浜田 満明(出雲市立東小学校 校長)

第4分科会「支援の必要な子ども達との活動からみえてきたもの」

- 発表者 伊藤 修二(島根県益田市:益田市子どもとともに育つ親の会)
「親の会発! ペットボトルピザ作りでユニバーサルなまちづくり」
- 川谷志津子(島根県松江市:NPO法人ねお)
「特別な支援が必要な子ども達が必要としていること」
- 田中 靖子(福岡県志免町:劇団きらきら)
「ありのままの君がすきです」
- コーディネーター 今村 隆信(春日市立春日西小学校 校長)

飲もう、語ろう、つながろう大交流会

[2月18日]

インタビューダイアログ「子ども達との活動からみえてきたもの」～次世代育成支援の中身と方法～

- インタビュアー 三浦 清一郎さん
- 登壇者 市原 悟子さん、入江 雅史さん(大山町教育委員会幼児教育課主管兼社教主事)、
浜田 満明さん、大畑 伸幸さん(ネーチャーキッズ寺子屋代表)
- インタビューダイアログとは(インタビュアーの三浦さんの解説より)
直訳すると「一問一答形式の対話」。インタビュアーは、インタビューをする役目と会場の参加者
とをつなぐ役割がある。一回の発言を短時間にして何度でも行う「短時間・多頻度発言」と呼び、順
番が多く回ってくるので、とっさに言葉が出なかつたら「パス」と言ってよいルール。

子どもフォーラム in 綺羅星7への提言

提言者 山本 健慈さん

エンディングセレモニーメッセージ(子どもフォーラムのうた)」

作詞&作曲&歌 らこんた(岩井加恵、長嶺智恵子、村上圭介)

「第11回融合フォーラム in 島根」の進捗状況

ことしの融合フォーラムは島根で開催されます。実行委員会によって、着々と準備が進められて
おります。現在までの「案」をご覧ください。ぜひ参加できるように日程の調整をしておいてくだ
さい。

第11回融合フォーラム IN しまね 融合研創立10周年記念事業
(兼)第7回子どもフォーラム IN 綺羅星7実施要項(案)

1. 開催の趣旨

平成11年、島根県で地域教育コーディネーター制度が立ち上げられ、綺羅星7での
「学社融合」も同時にスタートしました。その間、多くの地域で、そして全ての学校でさ

さまざまな実践が行われてきました。学校という施設へ、そして授業の中に数多くのボランティアが自然に、そして当たり前のこととして出入りするようになりました。そうした実践の中から私たち綺羅星人は多くのことを学んできました。学校だけでなく、幼稚園や保育園でも融合の発想は必要ではないかということ。様々な支援を必要とする子ども達の成長にとって、融合の発想はより重要なのではないかということ。そして、働くお母さん達にとって、いつも仕事で忙しいお父さん達にとっても、そして仕事をリタイアした高齢者にとっても融合の発想は今以上に元気な綺羅星人になるために、そして今以上に輝く綺羅星になるために重要なのではないかということ。

「子ども達のために共働で！」という視点でスタートした「学社融合」でした。もちろん今でもそうした視点を大切にされた実践が積み上げられています。でも、綺羅星の「学社融合」は、当然のことながら子ども達のためだけであってはならないのです。

大都市での少子化は、空き教室の創出につながるのでしょうか。しかし、綺羅星のような地方にあっては、即廃校という課題に直面することになるのです。学校がなくなるという現実を突きつけられ時、ただ郷愁にひたるだけの地域になるのか、そこから立ち上がろうとする地域をつくるのか……。綺羅星は後者を選択したいと思います。学校は子ども達のものだけではありません。ですから、学校に関わり、子ども達に関わることで、ますます元気でハッピーな綺羅星作りのための「学社融合」でなければならないのです。

そんな地方の町の元気な地域づくりに視点をいた「学社融合」について、学び、実践するために、益田市の「へそ」であり、また、そうした地域づくりのためのさまざまな実践が展開されている「真砂地区」において本大会を開催します。

2. 主催 学校と地域の融合教育研究会
3. 主管 学校と地域の融合教育研究会島根支部
4. 共催 益田市 益田市教育員会 ネイチャーキッズ寺子屋 益田市保育研究会 NPO
法人コアラッチ
5. 後援 島根県教育委員会 小学館 子ども環境学会 農文協 各新聞社
6. 日時 平成19年10月27日(土) 13:30~
10月28日(日) 12:00
7. 会場 益田市立真砂小学校・真砂中学校 他周辺施設
8. テーマ **きっと 子ども達のために**
きっと もっと あなたのために
~子どもがいるから学校がある 学校があるから学社融合できる~
9. 日程
 - 27日(土)
 - オープニングセレモニー(13:30~13:45) 真砂小学校講堂
 - 基調提案(13:45~14:25) 真砂小学校講堂
 - 「真砂発! 中山間地域の学社融合を考える!」
 - 分科会(14:45~17:00) 各会場
 - 第1分科会 「就学前の子ども達について親について家庭について語ろう!」
 - 事例 益田市保育研究会(融合研島根支部)
 - 事例 アトム共同保育園
 - 第2分科会 「地域教育コーディネーターについて語ろう!」
 - ~コーディネーターのこれまでとこれから~
 - 登壇者 浜田満明(前島根県教育庁生涯学習課課長補佐)
 - 藤原義満(島根県教育委員会教育長) これから交渉します。
 - 地域教育コーディネーター新旧経験者数名
 - 第3分科会 「学校の統廃合について語ろう! ~どのように考え、どう生かす? ~」

登壇者 若松進一（前双海町教育委員会教育長） 現在交渉中
矢野大和（佐伯市観光大使） 現在交渉中
飲もう、語ろう、つながろう大交流会（18：00～20：00） 真砂小学校講堂

28日（日）

パネルディスカッション（9：00～11：45） 真砂小学校講堂

「コミュニティー・スクールからスクールコミュニティーへ」
（9：00～11：45）

登壇者 岸 裕司（融合研副会長）
若松進一（前双海町教育委員会教育長）
その他検討中

エンディングセレモニー（11：45～12：00） 真砂小学校講堂

10. 参加料 無料？

11. その他

宿泊について

できる限り参加者の方々には、真砂地区内での民泊をお願いしたいと考えている。

《編集後記》

「もっと早く」と思いながら、34号の発行が遅くなってしまいました。年度末・年度開始のこの時期の発行は、毎年のことながら、余裕を持って準備をしても滞ってしまいがちです。

今号は、2年間続いた「ゆうごうこども教室」の総括をする意味で開催された会議の様子を主に発行する予定でしたが、10周年記念事業が始まっていることと、島根フォーラム開催地での活動が大変素晴らしいものであることから、その概要も掲載することにしました。各地での活動が盛んになっていることは大変喜ばしいことです。

本来は、写真も多くて読みやすい原稿をいただいているのですが、諸般の都合で文字の多いダイジェストになってしまったことをお詫びします。各活動の記録担当者に報いるためにも、是非じっくりとお読みいただきたいと思います。（M）